

水の回廊機能を活用する北総地域の都市再生の考察*

Study of urban renewal in HOKUSOU area by river water corridor*

伊藤照夫**・古川巖水***・吉田正彦****・吉川勝秀*****

By Teruo ITO**・Izumi FURUKAWA***・Masahiko YOSHIDA****・Katsuhide YOSHIKAWA*****

1. はじめに

戦後の干拓が行われる以前の印旛沼は、利根川から南に20km以上にわたって水面が続いていたため、印旛沼を利用して船で利根川と江戸湾（東京湾）を結ぶ一大流通路を開発することが江戸時代から国家的なプロジェクトとして試みられてきた。これは、実現しなかったものの、利根川からの印旛沼の舟運は、河岸やそれらを結ぶ街道と集落を発展させ、地域構造の基本を形成した。従って、かつての利根川と東京湾を舟運ルートで繋ぐ可能性が具体化すれば、印旛沼の水の回廊機能は、北総地域の地域資源の大きな魅力になる。印旛沼は、その上下流の水門で水位が管理され、水位変動が少なく、舟運の安定性の面で高い優位性をもつ。印旛沼と東京湾を結ぶための印旛放水路の水理条件の課題を整理すると共に、地域構造の骨格を活かした新たなまちづくりの上での舟運の意義を考察し、地域再生のための舟運復活の可能性を検討した。

2. 印旛沼の舟運と地域の構成

(1) 河岸と渡し

千葉県北総地域に位置する印旛沼の周辺が“香取浦（海）”といわれる太平洋につながる海であった頃には、

*キーワード：舟運計画、都市再生

** (株) アイ・ティー・オー

(千葉県松戸市日暮1-10-5、
TEL047-389-9367、FAX047-389-9395)

***千葉県企業庁

(千葉県千葉市美浜区中瀬1-3 幕張テクノガーデンD棟、
TEL043-296-8134、FAX043-225-6022)

****千葉県葛南地域整備センター

(千葉県船橋市浜町2-5-1、
TEL047-433-2421、FAX047-434-4727)

*****日本大学理工学部社会交通工学科

(千葉県船橋市習志野7-24-1
TEL047-469-5228、FAX047-469-5228)



図-1 印旛沼の位置

水深が深かったことから、外海の船が航海していたことが想像される。¹⁾

しかし、海退と香取浦への流入土砂の堆積で浅くなり、利根川東遷後は、喫水が浅い高瀬船などの川船が利根川を往来した。利根川に繋がる印旛沼にも奥まで船が入り、沼の沿岸にいくつかの“河岸”を発達させたと考えられる。河岸は、沼を横切る“渡し”の舟着場の機能を果たしながら、ヒトとモノの集積を促し、地域の経済・文化の中心として発展して行った。

渡しは、架橋されるまでの唯一の沼を渡る交通手段であった。両岸の渡し場の距離は、500m から1km程度で、30分以上を要したと想像される。これらの河岸の繁栄は、明治30年代の鉄道の開通などによる陸上交通の発達の影響となり衰退し、渡しは橋に代わり、舟運の姿は昭和30年代に消えた。

(2) 沼を巡る地域構成の変化

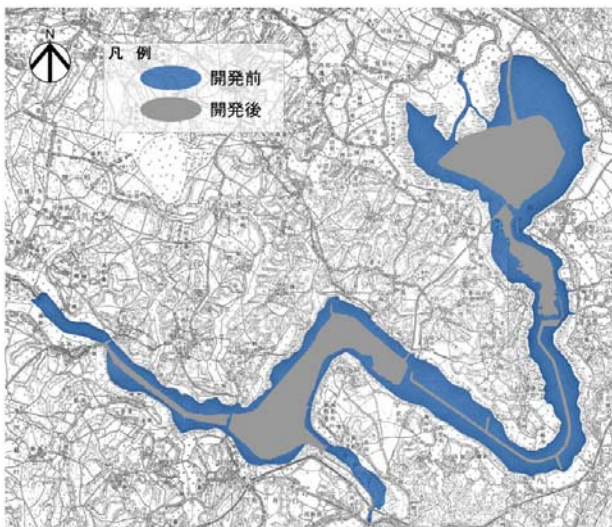
河岸の集落は、明治期の鉄道敷設に当たっては、沼の東側を巡る鉄道が、安食（成田線）、酒々井、佐倉、臼井（京成線）などの河岸の集落付近を通るルートに設定されたことから判るように、現在の地域構造を形作る基礎になっていたと判断される。

しかし、昭和中期に実施された印旛沼開発は、中央部の干拓による沼の縮小、捷水路や放水路の掘削による地域の分断など、かつての沼の形態を前提とした地域構造を変えた。そして、千葉ニュータウンのように北総台地に展開する大規模開発は、印旛沼周辺の地域構成を大きく変えている。その開発の基軸となる鉄道や幹線道路は、沼周辺の地域構造の枠を超えて広域的な役割を担って整備され、東京都心から50 km圏にあって、首都機能のシステムに徐々に組み入れられつつある。



図ー2 河岸と渡しの分布

資料：白鳥孝治著「生きている印旛沼－民俗と自然－」 葦書房出版 2006年発行、上毛新聞社・埼玉新聞社・下野新聞社・茨城新聞社・千葉日報社編集「利根川322キロの旅」1997年発行



図ー3 印旛沼開発事業による沼の変化

3. 水の回廊機能の活用を目指す背景

(1) 「水運」の夢に馳せた長い歴史

江戸時代から昭和初期にかけて印旛沼の水を東京湾に落とすために、幕府や国の大事業として数次にわたる開削計画と工事が行われた。

しかし、全て失敗もしくは中断し「治水」「新田開発」に加えた江戸と北関東、東北とを結ぶ「水運」は、夢と終わっている。この「水運」の開発は、江戸を控えた北総地域にとって流通拡大による地域振興の一大プロジェクトであった。

(2) 未来の魅力ある地域構成の中核

印旛沼の水を落とそうとした東京湾には、“幕張メッセ”等の注目を集める未来型都市が湾岸沿いに出現し、また、印旛沼周辺の丘陵地には、我が国の空の玄関“成田空港”が位置すると共に、“千葉ニュータウン”“成田ニュータウン”等の新しいまちづくりが展開している。印旛沼・印旛放水路は、周辺丘陵地の開発が進む中で、地域の個性を表わす水辺の自然を生かした魅力あるまちづくり・地域活性化の軸として期待される。例えば、北印旛沼北岸の本埜村では、「水と緑のまちづくり」(HOPE計画推進事業)の中で、『レイクタウン』の整備を標榜し、“転入者と地元住民、流域市町村を結ぶ交流拠点”づくりを整備目標²⁾の一つとして挙げて千葉ニュータウンの入居による村の変化³⁾を認識した計画となっている。

舟運にとって今の印旛沼は、治水・利水などの面で水位がほぼ一定にコントロールされており、航行や係留に有利な条件をもつ特殊性をこれらのまちづくりに活かすべきである。

4. 水の回廊機能を活かしたまちづくり

(1) “船遊びが出来る”まちづくり

水位が安定していることと、安定した水域が20 km以上続く湖沼であるという優位性を活かし、舟着場を持つ住宅地を計画的に整備し、船遊びを日常化させる。プレジャーボートの棧橋を配した住宅は、我が国では、稀である。首都圏の中では、現代版の水郷的な地域開発として注目を集め、地域がブランド化されると考えられる。また、かつての“河岸”・“渡し”の歴史に重ねた新規の舟着場の整備による船利用の定着化を図る。

(2) 水の回廊機能活用の段階的展開

船利用が日常化・定着化し、“船遊び”が出来る湖沼のイメージが一般化した段階で、沼を拠点とする足の長い舟運ルートの開発へと発展させ、水の回廊機能のネットワーク化をより高度なものにして行く。

5. 水の回廊機能活用のためのネットワーク化の展開

(1) 広域交通との連携

水の回廊機能を可能にする物理的条件の整備（6. 参照）を推進しながら、新たな地域構造を生む広域交通との連携を図る。特に、建設が予定されている東京と成田を結ぶ「北千葉道路」と「成田新高速鉄道線」が沼を横断することから、水の回廊との結節を図ることを想定すべきである。

また、既設の国道16号の道の駅、京成本線、東葉高速鉄道、JR成田線等の駅との連携を図る。

(2) 観光・レクリエーション拠点との連携

国立歴史民俗博物館、県立印旛沼公園などの広域的及び地域的な観光・レクリエーション施設との連携を図る。

(3) 水辺活用のアクセスの確保

水辺を利用するためには、水辺へのアクセスの手段が確保されることが条件になる。水辺の人の動線（サイクリングロード・遊歩道等）・車の動線の確保が、地域の魅力を引き出す形態でネットワークされることが望まれる。

6. 水の回廊機能のネットワーク化の物理的条件の整備

(1) 東京湾への舟運を可能にする花見川の改良⁴⁾

a) 河川改修事業により計画河床まで河道を掘り下げる。また、最上流の大和田排水機場付近で、喫水深が確保できるように必要に応じて、計画河床より掘り下げる。（図-4の①）

b) 大和田排水機場の脇に水路とゲートを新設し、船舶の通行を可能にする。（図-4の②）

c) 現在、治水上障害となっている長作・天戸制水門は、河川改修に併せて改築（天戸制水門は撤去）し、水路とゲートを設けて舟通しを図る。（図-4の③）

(2) 舟運ネットワークの形成

a) 中央排水路と両沼を結ぶ舟通し設備を設けると共に、喫水深確保のため河床低下を図る。（図-4の④）

b) 桁下高の低い橋梁の改良等障害物の解消を図る。

c) 長門川の喫水深確保のための河床低下を図る。（図-4の⑤）

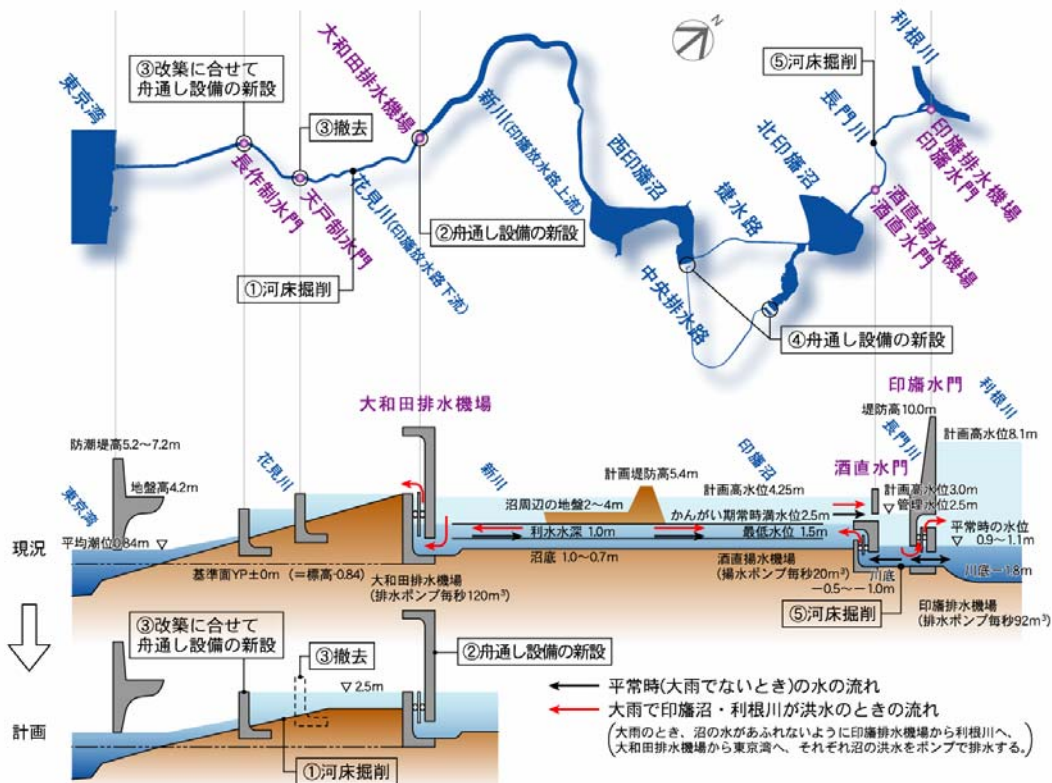


図-4 印旛沼の水位・水向の現況と河川舟運を可能にするための対策（□内）

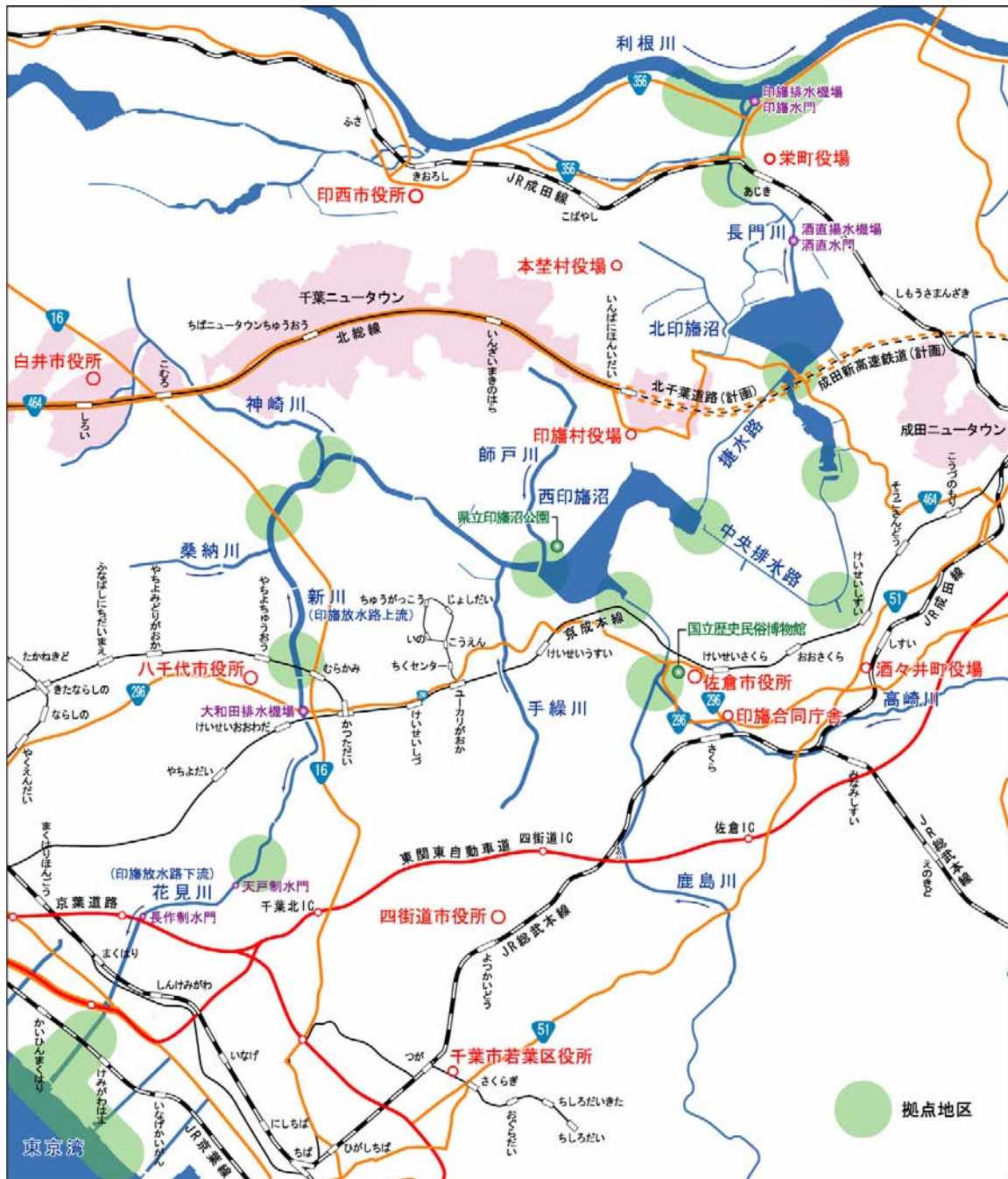
資料：「県単河川調査委託（河川舟運構想）報告書」平成11年3月千葉県印旛土木事務所
「水のはなし」平成17年千葉県総合企画部水政課

7. おわりに

この考察は、千葉県北総地域が首都機能に近い位置にありながら、沼の存在が地域発展の妨げとなっていた可能性があることに鑑み、この可能性があったからこそ残り得た湖沼の自然に展開する水の回廊機能に着目し、これを都市再生・地域振興に活かす方途を検討したものである。今後は、舟着場（住宅及び公共用）の河川占用条件や水利権者、漁業者との権利上の調整が必要となる。この考察が今後の北総地域のまちづくりに寄与すれば幸いである。

参考文献

- 1) 白鳥孝治：「生きている印旛沼－民族と自然－」，pp. 38, 2006
- 2) 千葉県本埜村：「水と緑のまちづくり・本埜村 HOPE 計画推進事業報告書」，pp. 51, 52, 1997
- 3) 千葉県本埜村：「水と緑のまちづくり・本埜村 HOPE 計画推進事業報告書」，pp. 31, 1998
- 4) 三浦裕二ほか：「運河 再興の計画 房総・水の回廊構想」，pp. 3, 1996



図－5 水の回廊を活用する拠点